

世界に通じる留学生を育てる

原田 昭

人間総合科学研究科教授

「世界に通じる学生を育てる」ということを考えると、ついつい、日本人学生を世界に通じさせるためにはどのような教育をすればよいかということを考えがちであるが、世界に通じる学生を育てるために、世界に通じる留学生教育を基盤とした発想があってもいいのではないか。本学には沢山の留学生が学んでいる。日本人学生と留学生との関係はまさに国際的関係である。しかし双方向の関係が成立しないでは国際感覚は生じない。

世界に通じるということの意味は、各分野における国際的相互理解や相互の信頼性に基づいた友好関係を構築することに他ならない。国際的人材養成を世界に通じる戦略として位置づけることが必要なのである。

文部科学省の「留学生10万人受け入れ計画」は平成15年度においてほぼ達成したとされているが、これからは「受け入れ」ではなく国際的「交流計画」をいかにデザイ

ンするかが課題であると思う。

日本の留学生総数は、109千人で日本の高等教育在学者数は3,606千人であるから留学生の占める比率は3%である。ちなみに英国は18.5%、ドイツは12.6%、米国は6.5%であり、まだまだその水準は低い（わが国の留学生制度の概要 文部科学省、平成16年版）。それでも筑波大学は留学生1,161人で在学生総数は16,383人（筑波大学概要（2004.5.1現在））であるから留学生の占める比率は7.1%であり国際的にも高い水準にあるといえよう。

そこで本学こそ、「海外との国際相互交流教育」のような特色ある教育GPを提案していいのではないかと考えるのである。

これまで留学生に対するわが国の態度は、留学生を「受け入れる」という受動的な色彩が濃厚であり、留学生を通じた国際的「相互交流」という能動的な意識が薄いのではないだろうか。留学生の多くは、学位取得

後に母国に帰り研究者や教育者になって母国のリーダーとして活躍する人たちである。いわば留学生は彼らの国とわが国とを繋ぐ相互交流の担い手である。そのような留学生に対して、わが国はどのような相互交流プログラムを準備すべきかという問い掛けが欠落していると考えるのである。留学生にとってもいまや大学は知識の交換場だけではなく、極めて重要な国際的文化交流の場であり、国際的感性を形成する場とみなす人たちが多くなっている。日本での国際感覚を母国に持ち帰って彼らの国の若い人々を教えるのである。

教師にとっては学位を取得した留学生が帰国した後に活躍している話を聞くのは大変うれしいことである。彼らが本学との相互交流として学生交換や大学訪問を活発化してきていることそのものが世界に通じる教育の結果であるということを示している。

例をあげると、芸術専門学群、芸術学研究科の私の教え子たちは、清華大学副学長、フィリピン大学建築学部長、韓国科学技術大学デザイン学科長、ソウル大学デザイン学部教授、マサチューセッツ工科大学教授、仏国コンピーニュ大学教授等となって活躍しているが、現在でも本学との大学間相互交流としての研究者、学生交流を活発に行っている。

そのような意味で、留学生と日本人学生

との間の交流形成を在学中にいかに関与させるか国際的視野を持った日本人学生の育成のトリガーとなるのであり、国際的社会に対する知的貢献であり、さらに本学の国際化、国際競争力の強化であり、「世界に通じる学生を育てる」教育に繋がることになるのだと思う。

しかし、平成15年度筑波大学学生実態調査によれば、日本人と留学生との交流について、「積極的に交流している」と答えたのは14.8%、「あいさつ程度」が29.9%で、「交流していない」と答えた学生は52.6%と、2人に1人は留学生と交流していないのである。これでは国際化は進まない。一方本学での海外渡航経験を持つ学生は55%いるが、その目的のほとんどは観光である。これでは世界に通じる学生は育たない。

私の教え子が、日本に来るたびに必ず訪問する家庭がある。それは私の友人で笠間市に住む元市役所の山田さんという人であるが、私の教え子を自分の子供のようにいつでもおいでといってくれる優しさを持っている。留学生達は筑波に来ると必ず山田さんの数寄屋造りのお宅を訪問して日本のもてなしと生活様式と文化の味を堪能させてもらうのである。しかし一方で、日本に留学しながら日本人学生の友人もなく、日本文化との触れ合いもなしに帰国する多くの留学生たちが存在しているのも確かだ

ある。私自身は、大学に来て以来25年間JDクラブという催しを開いている。今年で62回目になる。毎年学群3年生の生産デザインコースの学生全員が留学生と私の筑波の友人たちをもてなす会である。最近では40名もの人たちが筑波の並木宿舎に集う。男子学生が買い物と会場をつくり、女子学生が腕を振るって料理をつくる。私はいつもリブステーキを焼くだけであるが、ひたすら食べて語り合い、お土産を交換する会である。ちょっとした付き合いのきっかけ作りになればと思っている。

私は、世界は本学の留学生と日本人学生との間にあると考えている。今こそ「日本文化に触れる」というテーマで、留学生教育プログラムを抜本的に改革し、留学生教育をベースにした国際教育戦略を構築する必要があるとおもう。

「日本文化に触れる」留学生教育戦略とは次のようなものである。

1. 先導的留学生交流の支援

学術だけでなく友人関係、生活、自然環境、歴史や文化など留学生に開いた総合的な魅力作りが大学には必要である。特に本学は東関東に位置する美術館、博物館、民芸館、文化ホールなどの文化資源と、異なる文化を持った人々が触れ合い交流を深める大学独自の留学生交流プログラムを推進する必要がある。

2. 留学生交流支援プログラムの設置

本学の学生宿舎では、日本人学生と留学生とを分離して居住させているケースが多いが、これは双方にとってマイナスである。留学生の隣人は日本人とするように改定すべきである。日常的な国際感覚が世界に通じる教育に繋がるからである。さらに留学生との日本人学生との交流を活性化するためには、授業ばかりではなく、学生自らのボランティアによる人間的触れ合いを通じた文化交流プログラムを作り積極的に支援することが必要であろう。

3. 留学生と筑波地域住民との交流の促進

留学生に日本文化をよく知ってもらうためには、筑波という地域の人々と交流を深めるために、地域ボランティアによるホームステイなどを大学主導でマネージすることなども考えられよう。

4. 日本企業でのインターンシップ参加の拡大

日本社会を知ってもらうためには、生活の中での触れ合いばかりでなく、産業界との触れ合いを体験してもらうことも重要である。企業のインターンシッププログラムに留学生を積極的に派遣することを大学の申し入れによって推進すべきである。

5. 海外拠点の構築

帰国後の留学生ネットワークを強化して、帰国後の留学生活動との交流拡大拠点であ

り、日本人学生の海外派遣支援拠点にもなり、かつ現地での本学入学試験拠点を開設することも考えられよう。世界に通じる教育を構想するなら、帰国後留学生による海外拠点の形成も検討するべきである。

6. 入口での支援から出口での支援の必要

留学生にとっては、論文を書いている最中に母国での就職活動をしなくてはならなくなる。そこで本学に在籍していても母国の就職相談が出来るようなシステムの構築が必要である。

7. 帰国者の教育・研究業績データベースの構築

HPを設けて、帰国後留学生が自ら参加でき、また大学自らが帰国後の留学生に対して情報を発信したり、近況をたずねたり、交流の場を準備したりして双方向のネットワークを活発化する自己増殖型の留学生ベースのネットワーク構築が世界戦略として不可欠である。

留学生にとって、日本は一つの世界である。世界に通じる学生を育てるための戦略は、留学生を通じた、世界に通じる教育という視点からも検討すべき戦略であると私は言いたい。

(はらだ あきら/感性認知脳科学)

